ベートーヴェンの「ハンマークラヴィーア」ソナタOp. 106 のイギリス原版をめぐる状況：出版社との関係に着目して

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越懸澤, 麻衣, Koshikakezawa, Mai メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2000041

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第52号　2023年度

研究論文

ベートーヴェンの「ハンマークラヴィーア」ソナタ Op. 106 のイギリス原版をめぐる状況

―出版社との関係に着目して―

Beethoven's "Hammerklavier" Sonata Op. 106 and its English Original Edition: The Relationship with the Publisher

越懸澤　麻　衣
Koshikakezawa Mai

1　はじめに

1-1　2つの「原版」がある「ハンマークラヴィーア」ソナタ Op. 106

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven（1770～1827）が作曲した《ピアノ・ソナタ 変ロ長調 第29番》Op. 106「ハンマークラヴィーア」ソナタ（以下 Op. 106）は、1819年にウィーンのアルタリア社（Artaria）とロンドンのリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーション（Regent's Harmonic Institution）の2社からほぼ同時に初版が出版された。ウィーン版の方が若干早く、1819年9月に出た。「GROSSE SONATE für das HAMMER=Klavier」というドイツ語タイトルと、「GRANDE SONATE pour le Piano-forte」というフランス語タイトルのものがあったが、タイトルページ以外は同じ内容であった（なお、このドイツ語タイトルにある楽器名表記により、一般に「ハンマークラヴィーア」ソナタと呼ばれている）。イギリス版は、後に詳しく検討するように、2部分に分けて同年12月に「Grand Sonata for the Piano Forte」（現在一般的な楽章名でいえば第1、3、2楽章）と「Introduction and Fugue for the Piano Forte」（第4楽章）が出版された。

このように Op. 106 の楽譜がウィーンとロンドンで出版されたのは、ベートーヴェンが「当地〔＝ウィーン〕でのみ出版する場合よりも実入りが良くなる」（BGA 1258）ことを期待してのことで、これらの版はどちらもベートーヴェンが認め、彼に原稿料が支払われた楽譜、すなわち「原版 Original Ausgabe」である。それにもかかわらず、両者には明らかな間違いとともに「明らかな間違いとは確定できないような数多くの楽譜テクスト間の相違」（Gertsch 2001: 63）が見られる。さらに問題を難しくしているのは、ベートーヴェンの後期作品としては珍しく、Op. 106 には自筆譜[i]や版下用筆写譜が現存していないことである。つまり、私たちがいま手にできる重要な一次資料はこれらの2つの原版だけだが、両者の間のあまりにも多くの違いのために、ベートーヴェンが思い描いていた作品像がどのようなものだったのか正確に捉えることが非常に困難なのである[ii]。このような事情から、この作品の楽譜テクストについてはこれまでにも多くの議論がなされてきた。

1-2　先行研究

2つの「原版」があるといっても、従来の研究ではおおむねアルタリア社から出版されたウィーン原版の方が重視されてきた。それは、ウィーン原版がウィーン在住のベートーヴェンにとって自身で校正をする機会があり（実際、初版の後も若干の校正をした）、彼の「最終的な意図」をより反映していると考えられてきたからである。しかし近年、イギリス原版の重要性が再考されるようになってきた（沼口 2014、加畑 2020、加畑 2021a、加畑 2021b）。これらの研究では、19 世紀に広く普及した Op. 106 の楽譜がイギリス原版に基づいていたこと、そしてそれによって多くの重要な演奏がなされていたことが指摘されており、とりわけ Op. 106 の受容史を考えるとき、イギリス原版は軽視されるべきではないことが明らかになってきた。本稿の問題意識はこうした流れに与するものである[iii]。

ベートーヴェン作品のイギリス原版全般の意義については、アラン・タイソンの研究が先鞭をつけたといえる（Tyson 1963）。これは、比較的早い段階からイギリスでも人気を博していたベートーヴェン作品が、イギリスでどのようにして「海賊版」ではなく「原版」として出版されるようになったのかについての初めての本格的な調査であり、それまでほとんど無視されていたと言っても良いベートーヴェンの生前に出版されたイギリス原版に初めて焦点があてられた。また、ベートーヴェン作品の国際的な「時間差多発出版」については、大崎滋生がその著作のなかで何度も強調しているところである（大崎 2018）。著作権がまだ完全に国際的にカバーされていなかった当時、許可のない海賊版を阻止し、すべての国の楽譜出版から少しでも利益を得るためには、オーストリア、ドイツ、フランス、そしてイギリスなど、それぞれの国でライセンス版を出版する必要があった。ベートーヴェンはそうした楽譜出版の交渉を戦略的に行った最初の作曲家だったのである。

しかしこれまで、ベートーヴェンの楽譜を出版したイギリスの出版社としては、民謡編曲を直接ベートーヴェンに依頼したことで有名なエディンバラのジョージ・トムソン George Thomson（1757～1851）や、作曲家・ピアニストとしても活躍し、ウィーンを訪問した際に直接ベートーヴェンと出版交渉をしたムツィオ・クレメンティ Muzio Clementi（1752～1832）との関係が詳細に扱われてきたくらいで、Op. 106 を出版したリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションについては、ベートーヴェン研究の脈絡ではほとんど関心が向けられてこなかった。けれども、出版社にはそれぞれ、出版楽譜についての特色が少なからずあるため、Op. 106 のイギリス原版が出版された状況をより正確に把握するためには、その版元について知ることも重要である。リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションとは一体どのような出版社で、ベートーヴェンといかなる関わりを持っていたのだろうか。この小論では、大作である Op. 106 の作曲プロセスや作品分析には立ち入らず、イギリス原版がどのような背景で出版されたのか、出版社の観点に絞って論じてゆく。

2　リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションについて

2-1　出版社の歴史

リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションは 1818 年に発足した出版社である[iv]。ただし会社として正式に設立されたのは 1819 年 1 月のことで、実際の楽譜出版は 1819 年 4 月に入ってから

始まった。ステーショナーズ・ホール（書籍出版業組合事務所）への最初の記録は 1819 年 4 月 23 日に見られ、同日に 21 点が連続して登録されている [v]。

Op. 106 がステーショナーズ・ホールに登録された記録は、なぜか 1819 年 10 月 1 日と 12 月 24 日に 2 回ある [vi]。前者は不完全な登録であったか、その後に取り下げられたのであろう。いずれにせよ、Op. 106 は同社が出版を開始してから 1 年も経たない頃の出版物であったことがわかる。

出版社の事務所はロンドンのリージェント・ストリートにある「アーガイル・ルーム」に置かれた [vii]。ちょうど 1818 年に再建されたばかりの建物で、ロンドン・フィルハーモニー協会の事務所でもあった。またここは演奏会場としても使用された場所で、1824 年にはベートーヴェンの《交響曲第 9 番 ニ短調》Op. 125 のイギリス初演が行われた。

この出版社に携わっていたのは、「21 人のロンドンの主要な音楽教師」であり、その後すぐに 2 名が加わり、23 名でしばらく活動した（*The English Musical Gazette*, i（Feb. 1819）: 35）。彼らの名前と生没年は以下に示す通りである。

【表 1　リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションのメンバー】

Thomas Attwood（1765-1838）	Charles Knyvett（1752-1822）
William Ayrton（1777-1858）	William Knyvett（1779-1856）
John Beale（?-?）	F. C. Meyer（?-?）
John Braham（1774-1856）	Charles Neate（1784-1877）
Johann Baptist Cramer（1771-1858）	Jonathan Nield（?-?）
Franz Cramer（1772-1848）	Ferdinand Ries（1784-1838）
William Crotch（1775-1847）	John Bernard Sale（1779-1856）
M. D. J. Elliott（?-?）	Saust（?-?）
Thomas Greatorex（1758-1831）	Sir George Smart（1776-1867）
George Eugene Grifin [Griffin]（1781-1863）	Thomas Welsh（1780-1848）
William Hawes（1785-1846）	Samuel Wesley（1766-1837）
William Horsley（1774-1858）	

「主要な」と言われたとおり、ジョージ・スマートやヨハン・バプティスト・クラーマー、チャールズ・ニート、そしてフェルディナント・リースなど、当時のロンドンの音楽界で重要な役割を担った音楽家、かつベートーヴェンとも親しかった音楽家が多く名を連ねている。とくに、Op. 106 のイギリスでの出版を「仲介」した、とされるリースがここにいることは見逃せない事実である。このことについては次節で詳しく取り上げる。

その後、経営難や社内での不和などのため、スマート、ニート、リースは会社を去り、1823 年春からはトマス・ウェルシュとウィリアム・ハウズが主導するようになったという。つまり、上記メンバーで活動していた期間はごくわずかだったようだ。1827 年 7 月にハウズが破産宣言をし、その後はウェルシュが単独で活動した。この出版社は 1833 年 5 月まで続いた。

上記の出版社のメンバーについてもうひとつ注目すべきことは、ロンドンのフィルハーモニー協会（Philharmonic Society）の会員でもある人物がほとんどだということである。というのも、この出版社はフィルハーモニー協会の完全な下部組織ではなかったものの、浅からぬ関係を持っていたからだ。

ロンドン・フィルハーモニー協会は1813年2月6日、ロンドン在住の30人の音楽家たちによって設立された。リースが中心となり、ベートーヴェンをロンドンへ招聘することを企画したのもこの団体である。1817年6月9日付で招聘状が送られ、ベートーヴェンは渡英をかなり真剣に検討したが、最終的に彼がイギリスの地を踏むことはなかった。

リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションの設立には3つの目的があった。第一の中心的な課題は楽譜の印刷、出版、販売である。しかし加えて、楽器、とりわけピアノとハープの販売も行っていた。また、音楽図書館を設立することも将来的な構想にはあった（しかしこれは実現しなかった）。

なお、社名にある「リージェント（regent）」とは「摂政」という意味で、イギリスのジョージ4世（1762〜1830）の摂政時代に由来する。そのため、1820年1月に彼がイギリス国王に即位すると、「ロイヤル・ハーモニック・インスティトゥーション（Royal Harmonic Institution）」と社名が変更された。しかし社名変更後もプレート番号は引き継がれ、続きのプレート番号から継続して出版された。また、リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーション時代に出版された楽譜が1820年以降に重版された場合には、同じプレート番号のままタイトルページの社名のみが変更されて出版された。Op. 106の場合も、プレート番号は「290」（第1部）と「291」（第2部）で、どちらもリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションとロイヤル・ハーモニック・インスティトゥーションの両方の社名で出版された楽譜が現存している[viii]。

2-2　同社から出版された楽譜の傾向

この出版社の出版カタログは、今回の調査では確認できず、他社ではしばしば楽譜の背表紙などに簡易な出版カタログが掲載されることがあるが、そうした例もほとんどない[ix]。そのため、同社から出版された楽譜の全体像は現存する楽譜から再構成しなければならないが、いまのところ全点は確認できていないため、以下は暫定的な報告となる。

大きな特徴として言えることは、リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションのメンバーであった作曲家の作品が多く出版されていることである。なかでもクラーマー、リース、アトウッド、ハウズの作品は多い（ただし、必ずしも初版ばかりではなく、すでに他の出版社から出版済みの作品もある）。また、ジョージ・フリデリク・ヘンデル George Frideric Handel（1685〜1759）、ヨーゼフ・ハイドン Joseph Haydn（1732〜1809）やヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart（1756〜1791）など、当時すでに「古典」となっていたような作曲家の作品を、メンバーがピアノ用に編曲した楽譜も複数ある。他に「printed for the author」とタイトルページに記された楽譜もあり、メンバーが自費出版した例も散見される。こうしたことからは、自分たちの音楽を出版する、という意向が強かったことが窺える。

作品のジャンルとしては、ピアノ曲、室内楽、歌曲・合唱曲が大半を占めている。逆に交響曲や宗教曲はほとんどない。とくに初期の出版物に多いのはピアノ曲で、アマチュア奏者でも難なく弾けるような、さほど難易度の高くない変奏曲やロンドなどの小品が中心的なレパートリーであった。なかには「アーガイル・ルームで○○氏によって演奏された」とタイトルページに記されている楽譜もある。

では、こうした出版する作品はどのようにして決定されたのだろうか。ここで注目したいのは、『イギリス音楽雑誌』に掲載された以下の一文である。

> 20 人ほどの新しい「小さな協会 Little Society」が 2 週間に 1 度、キャヴェンディッシュ・スクエア近くのあるメンバーの家で会合を開き、自分たちの作品を批評に供し、互いに新作を議論している。
> (*English Musical Gazette*, i (Mar. 1819), p. 56)

この「20 人ほどの新しい『小さな協会 Little Society』」とは、具体名は記されていないものの、人数や時期を考えるとリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションのことと考えて間違いないだろう。「あるメンバー」については、当時リースがリージェント・パーク近くのキャヴェンディッシュ・スクエアに住んでいたため、リースのことだった可能性が高い。さらに、これがいわば「編集委員会」のような会合であり、リースを中心とした編集、校正チームであった可能性も指摘されている(Langley 2013: 30)。このことは Op. 106 の出版を考えるうえで、非常に興味深い。

2-3　同社から出版されたベートーヴェン作品

リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションから出版されたベートーヴェン作品の原版は Op. 106 のみであり、したがって当然とも言えるが、ベートーヴェン研究では同社は Op. 106 の脈絡でのみ言及されてきた。しかし、同社から出版されたベートーヴェン作品は Op. 106 だけではなかった。今回調査できた範囲では[x]、以下の作品が出版されていた。

【表 2　リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーション社および ロイヤル・ハーモニック・インスティトゥーションから出版されたベートーヴェン作品】

プレート番号	タイトルページの記載	作品番号
27	Air russe with Variations for the Piano Forte ... No. 1.	WoO71
90	Rondo for the Piano forte	Op. 51-2
130	Septett, 4 hands arr. by G. E. Griffin	Op. 20
163	A Favorite Air with Variations for the piano forte.	WoO 73
168	Sonata for the pianoforte : No. 1	Op 49
227	A favorite air, with variations for the piano forte : No. [hs.: 2]	WoO70
236	Rondo, for the Piano Forte. No. [3.]	Op. 22
243	La primavera : a rondo, for the piano forte	Op. 33-1
244	La libertà : a rondo, for the piano forte	Op. 33-2
245	L'allegrezza, a rondo for the piano forte	Op. 33-3
246	L'Estate : an air, for the piano forte.	Op. 33-4
247	An Exercise for the Piano Forte, calculated to develope the powers of the hand	Op. 33-5
248	L'autumno : an air, for the piano forte	Op. 33-6
290	Grand Sonata, for the Piano Forte.	Op. 106

291	Introduction & Fugue, for the Piano Forte.	Op. 106
303	Rondo, for the Piano Forte ; No. 4	Op. 79
386	Drei Sonaten, Op. 2	Op. 2
387	Drei Sonaten, Op. 2	Op. 2
388	Drei Sonaten, Op. 2	Op. 2
446	Ouverture Prometheus, Op. 43, arr. 4 hands by Joseph William Holder	Op. 43
504	A Favorite Duett, for two Performers on the Piano Forte, etc.	Op. 6
520	A sonata, for the piano forte, with an accompaniment for the violin ... Op. 12.	Op. 12-1
521	A sonata, for the piano forte, with an accompaniment for the violin ... Op. 12.	Op. 12-2
522	A sonata, for the piano forte, with an accompaniment for the violin ... Op. 12.	Op. 12-3
527	A Sonata, for the Piano Forte, with an Accompaniment for the Violin ... Op. 30. No. 〈3.〉	Op. 30-3
533	[Trio Op. 11]	Op. 11
864	Symphony Nr. 8, Op. 93, Septett arr. by Crotch	Op. 93
3297	Adelaide	Op. 46
?	Air with Variations	WoO 69
?	Variationen	WoO 74
?	Violinsonate, Op. 23 Nr. 2[!]	Op. 23

このように、「ロンド」や「人気の旋律による変奏曲」のようなベートーヴェンの作品のなかでは軽めのピアノ作品が多い。また、複数楽章からなる作品の場合、必ずしも全体がひとまとまりで出版されたわけではなく、ときに一部だけが出版され、あるいは分冊の形で出版されたこともあった（曲集内の番号が入れ替わっていることさえあった）。

興味深いのは、《7つのバガテル》Op. 33である。この楽譜は1曲ごとに分けて出版され、しかも、「春」や「自由」のようにベートーヴェンに由来しないタイトルが付されている。

繰り返しになるが、Op. 106以外はベートーヴェンの許可なく出版された楽譜である。ベートーヴェンと親交のある人物が複数おり、またリースの他にもスマート[xi]やニートなど、ベートーヴェンからイギリス原版の出版の依頼を受けたことのある人物までメンバーにいるにもかかわらず、これほどまでに多くの作品が自由な形で出版されているのには驚かざるをえない。

3　イギリス原版の出版をめぐるフェルディナント・リースの役割

六

Op. 106のイギリス原版の出版をめぐって、ベートーヴェンの弟子だったフェルディナント・リースが「仲介役」として重要な役割を担ったことは、ほとんどの先行研究で言及されていることである。しかしそれらでは、第2節で述べたように、リースがリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションのメンバーであった、という事実は考慮されていない。いわば出版社側の人間だったリースは、師匠の巨大な作品、Op. 106の出版にあたって、どのような立ち位置でありえたのだろうか。

3-1　ベートーヴェンとリースの関係

まず、ベートーヴェンとリースの関係をごく簡単に押さえておきたい[xii]。

フェルディナント・リースは、ベートーヴェン同様、ボン出身の音楽家である。ベートーヴェン家もリース家もともに宮廷音楽家の家系で、両家には家族ぐるみの付き合いがあった。リースの父に世話になったベートーヴェンは、若きフェルディナントがウィーンにやってきたとき、親身になって面倒をみてあげた。かくしてリースはカール・チェルニーとならんで、ベートーヴェンから指導を受けた「弟子」となった。徐々にピアニストとしても作曲家としても経験を積んでいったリースは、ベートーヴェンの楽譜の筆写係や出版社との事務連絡も担当するようになる。リースがウィーンでベートーヴェンとともに活動したのは 1801～1805 年と、さほど長い期間ではなかったが、信頼関係を築くには十分だったと思われる。リースがロンドンへ滞在していた 1813～1824 年には、ベートーヴェンとロンドンとの重要な橋渡し役となった。

3-2　書簡の再読から推測できること

では、Op. 106 の出版をめぐってベートーヴェンとリースの間でどのようなやりとりが行われたのか、書簡をたどることで確認していこう。ベートーヴェンが Op. 106 の出版を最初にリースに頼んだと考えられるのが、1818 年 5 月の手紙である。

> 私は、あなたが次の 2 作品、ピアノ独奏のための大ソナタ〔= Op. 106〕と、ピアノ・ソナタ〔= ピアノ三重奏曲 Op. 1-3〕を私自身が 2 つのヴァイオリン、2 つのヴィオラ、1 つのチェロのために編曲した五重奏曲〔= Op. 104〕をロンドンの出版社に売ってくれたらと願っています。2 つの作品で、金 50 ドゥカート〔を得ること〕はあなたにとって容易いことでしょう。
> （ベートーヴェンからリースに宛てた 1818 年 5 月 19 日またはその直前の手紙、BGA1258）

この件でリースがベートーヴェンに返信したのは、半年以上が経ってからであった。1818 年 12 月 18 日付（BGA1274）で、リースはイギリスで出版するための版下用の筆写譜を送るよう依頼したものと思われる（この手紙が現存しないのは惜しまれる）。それに応える形で、ベートーヴェンは 1819 年 1 月 30 日に手紙を書き送り（BGA1285）、その内容からはその直前に筆写譜が発送されたと考えられる。1819 年 3 月 8 日には、それが「大急ぎで書かれた」ものであるため「ソナタには恐ろしくなるほど大量の間違いがあるはず」だと伝えた（BGA1294）。実際、3 月 19 日には「このソナタの筆写譜に、どうしてこれほどまでに多くの間違いが入り込んだのか、私は理解に苦しみます」というベートーヴェンは、100 か所以上にも及ぶ長大な訂正リストをリースに送付した（BGA1295）。もっともそのリストに記された項目は、イギリス原版でも、ウィーン原版でさえ、完全には反映されていない（加畑 2021a：30～58）。

ここで留意すべきことは、こうしたやりとりがなされていた時期にはまだリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションから楽譜が出版されていなかったことである。リースは当初、どこか他のイギリスの出版社に売却できる見込みがあったのだろうか。もちろんその可能性もあるだろう。しかし、

1818年12月末には出版社設立に向けた動きが本格化し、リースが新たな出版社の船出にふさわしい目玉商品としてベートーヴェンの作品を出版しようとした、ということもありうるのではないだろうか。

イギリスではピアノ音楽はたいへん好まれており、とくに女性を中心にアマチュア奏者は多かった。しかし楽譜の主な顧客層に当たる彼女たちの演奏のレベルは決して高いとは言えなかったらしい。そうした事情については、ジョージ・トムソンがしきりにベートーヴェンに訴えた言葉から想像できる。たとえば少し時代はさかのぼるが、トムソンは1806年11月23日付の手紙で「私たちの若い女性たちは難しい伴奏は好まず、演奏の仕方もほとんど知らないので、ピアノ伴奏はシンプルで簡単に」してほしい、とベートーヴェンに注文を付けている（BGA 409）。さらにトムソンは、1819年11月23日付の手紙で「あなたの作品の演奏の難しさが、この国でそれらがわずかしか売れない、真の、そして唯一の原因」である、とまで述べている（BGA1357）。またニートも、ベートーヴェンのためにイギリスでの出版社探しを手伝ったことがある。《2つのチェロ・ソナタ》Op. 102の買い手を探したニートだったが、それが難航した様子を次のようにベートーヴェンに書き送っている。

> 私はあなたのソナタ〔= Op. 102〕を、とある出版者に提供しました。彼はそれを難しすぎる、と言いました。そして彼は、受け入れられないようなものは提供できない、と言ったのです。
> （ニートからベートーヴェンに宛てた1816年10月29日付の手紙, BGA987）

ベートーヴェン自身も作品の難易度は心配していたのであろう。「あのソナタがロンドンにはふさわしくないというのならば、別のソナタを送ることもできます」とリースに書き送っている（BGA1925）。

こうした状況にもかかわらず、Op. 106は「難なく出版社が見つけられた」（Tyson 1960: 21）のはなぜだろうか。それは出版を請け負うことになる出版社が、リースにとって「自社」だったからかもしれない。彼は多少利益を度外視してでも、ベートーヴェンの作品を出版しようと考えたのではないだろうか。ラングリーが指摘するように、リースの家が編集のための会合の場所となっていたのならばなおさら、彼はイニシアティブをとって師匠の作品の出版を推し進めることができたであろう。他にも、同じく同郷のペーター・ザロモンやジョージ・スマート、チャールズ・ニートなど、ベートーヴェンの作品の崇拝者が多くメンバーにはいた。だからこそ、他の出版社との交渉が難航することが予想される、この難解かつ長大な作品が引き受けられたのかもしれない。

一方、ベートーヴェンの手紙では五重奏曲Op. 104とソナタOp. 106はほぼ常にセットで言及されているが、Op. 104の方はリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションではなく、ロンドンのエリザベス・ラヴェヌ社から出版された。とはいえ、これはアルタリア社のウィーン原版の海賊版として出版されたものとみられる（Tyson 1963: 108-109）。Op. 104がリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションから出版されなかったのは、オリジナル作品ではなく編曲物だから、という理由は考えにくい。そうした作品も同社から多く出版されているからだ。むしろ五重奏という編成が、リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションにとってはふさわしくないとされたのではないだろうか。同社から出版された室内楽は、ヴァイオリンとピアノの二重奏やピアノ三重奏がほとんどで、五重奏は例外的であった。いずれにせよ、リースは『ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンに関する覚

書』のなかで、自らがロンドンでの楽譜出版に携わった作品として Op. 106、110、111、119、120 のみ言及しており（Ries 1838: 107, 123）、Op. 104 も同様にベートーヴェンから依頼されたものの、積極的には関わらなかったようだ。

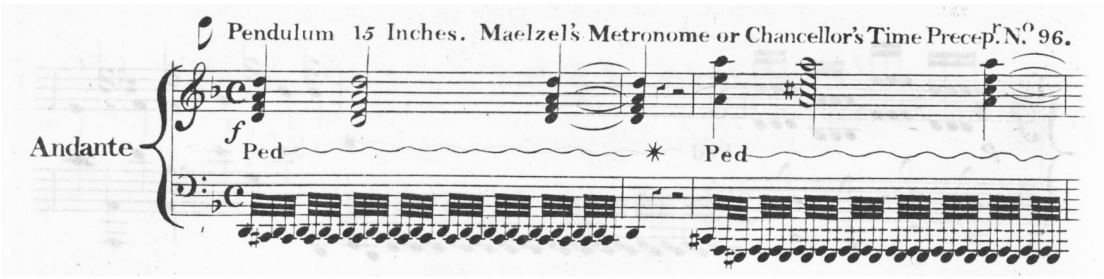
もうひとつ興味深いことは、1818 年 12 月 18 日付の手紙でリースがベートーヴェンに Op. 106 のメトロノームの数値の記載を依頼していることである（BGA1274）。そこでベートーヴェンは 1819 年 4 月 16 日[xiii] 付の手紙でリースにメトロノームの数値を伝えた（BGA1309）。この手紙には「第 1 楽章のアレグロ」は二分音符＝ 138、「第 2 楽章のスケルツォ」は付点二分音符＝ 80、「第 3 楽章」は八分音符＝ 92、「第 4 楽章イントロドゥツィオーネ　ラルゴ」は十六分音符＝ 76、「第 5 楽章 4 分の 3 拍子」と「最終楽章」は四分音符＝ 144、とある。だが実際の楽譜に記されているのは、第 1 楽章が二分音符ではなく「四分音符＝ 138」、スケルツォ（イギリス原版では第 1 部の第 3 楽章に相当）は「二分音符＝ 80」となっている。この違いは単なる印刷ミスというより、ベートーヴェンが書いてきた数値が速すぎるとリースが捉えたために変えたのであろう。

たしかにベートーヴェンは個人的にも親交のあったヨハン・ネポムク・メルツェル Johann Nepomuk Märzel（1772〜1838）が発明したメトロノームに強い関心を示していた。1817 年、モーゼルに宛てて「私としては、アレグロ、アンダンテ、アダージオ、プレストという無意味な呼称は止めたいと、ずっと以前から思っていたのです。メルツェルのメトロノームがその最も良い機会を与えてくれました。今後私の新作にはもう決してこんな記号は使わないと、お約束しましょう」（BGA1196、下線はベートーヴェン自身による）と書き送ったこともある。また同年、それまでに作曲していた交響曲第 1〜8 番にメトロノームの数値を付け、『総合音楽新聞』に発表もした。しかしピアノ・ソナタでメトロノームの数値を指示したのは Op. 106 だけである。しかも、ベートーヴェンのいわば「メトロノーム熱」は 1817 年をピークに、急激に冷めていったように見える。リースからの依頼がなければ、ベートーヴェンはピアノ・ソナタとしては例外的に Op. 106 にメトロノームの数値を指示しようとしなかったのではないだろうか。

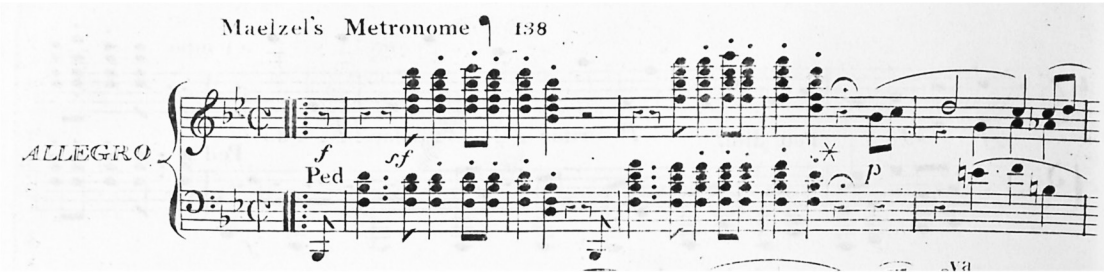
注目すべきことに、Op. 106 の直前に出版されたプレート番号 289 のモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》K. 527 をクロッチがピアノ用に編曲した楽譜でも、メトロノームの数値が指示されている。もっとも、今回の調査で現物を確認できたものの範囲では、同社の出版物の大部分にメトロノームの数値が付されているとは言えないのだが、出版社が、あるいはリースがメトロノームの数値の記載に積極的であったことと Op. 106 のメトロノームの数値が関係している可能性を指摘したい。

【譜例 3　モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》（クロッチ編曲）　第 1〜3 小節】

九



【譜例４　ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ》Op. 106 第１楽章　第1～5小節（イギリス原版）】



4　ウィーン原版とイギリス原版における相違の背景についての試論

２つの原版には、多くのテクスト上の相違があり、これまでの楽譜校訂者たちを悩ませてきた。詳細な比較は加畑奈美の博士論文で取り上げられており（加畑 2021a）、ここではその詳細には立ち入らない。本論では楽章配列と音域の２点に焦点を絞り、それらがリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションの出版物という脈絡でどのような意味を持ちうるか、試論を述べたい。

4-1　楽章配列

まず、もっとも根本的とも言える問題、楽章配列について考察していこう。

イギリス原版では、４楽章からなるこのピアノ・ソナタが２冊に分けて出版されている。初版においてはタイトルページに「大ピアノ・ソナタ」と「導入とフーガ」とだけ書かれ、これらが本来は１つの作品であることは示されていなかった。その後、「第１部」「第２部」と明記され、２つで１つの作品であることが伝えられるようになった。

このようにイギリス原版がウィーン原版と異なる形で出版された背景には、リースに宛てたベートーヴェンの次の手紙での言葉がある。

> 最後の楽章は、ラルゴを省いて、直接フーガで始まるようにしても構いません。あるいは、第１楽章にアダージョを続け、３つ目をスケルツォにして、第４楽章はラルゴもアレグロ・リゾルートも全部なくしてしまっても構いません。第１楽章とスケルツォだけにしても良いでしょう。この点については、あなたが一番良いと思うものに委ねます。
> 目下、他のことで手一杯になっているので、新しいソナタを書くとなると、かなり困ったことになります。このソナタは衝動に突き動かされて書かれました。パンのためだけに作曲することは過酷だからです。
> （1819年３月19日付、ベートーヴェンからリースに宛てた手紙、BGA1295）

つまり、ベートーヴェンは３つの選択肢をリースに示し、彼にしては異例なほど、作品の形の決定を彼に委ねた。整理すると

①　第１楽章、第２楽章、第３楽章、第４楽章（導入なし）

② 第１楽章、第３楽章、第２楽章

③ 第１楽章、第２楽章

をベートーヴェンは提案した。しかし、前述のように、リースが実際に選んだのは完全にはベートーヴェンが提示した方法にあるものではなかった。すなわち、②の「第１楽章にアダージョを続け、３つ目をスケルツォに」したものの、第４楽章を省略することなく別途出版したのだ。いずれにせよ、ベートーヴェンが想定した作品像が、ウィーン原版で出版されたような、現在一般的に知られている４楽章構成であることは疑いの余地がないが、どうしてもそうでなければならないと強く考えていたわけではなく、他の形もあり得る、と捉えていたことは興味深い。

ところで、ベートーヴェンの提案に反して、リースが第４楽章を単独の作品として出版したのはなぜだろうか。それは、この大規模なフーガこそ、ベートーヴェンの後期の対位法への傾倒、その技法の極致を示す作品のひとつであり、イギリスの顧客層にはふさわしくなかったからではないか。リージェンツ・／ロイヤル・ハーモニック・インスティトゥーションの出版物にフーガ作品は少ない。

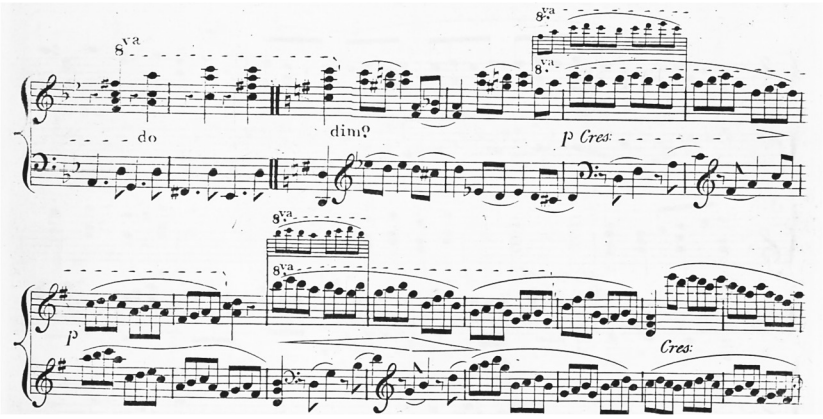
けれども、その数少ないフーガ作品のなかに２つ、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach（1685〜1750）の楽譜が含まれていることに示唆的なように[xiv]、この出版社のメンバーであるジョージ・スマートやとりわけサミュエル・ウェスリーは、イギリスのバッハ受容において非常に重要な役割を果たした人物であった（Kassler 2004）。彼らの対位法に対する強い関心が、ベートーヴェンの独特なフーガ楽章を、単独であっても、出版させる動機になっていたのではないだろうか。もっとも Op. 106 のフーガとイギリスにおけるフーガの位置づけについては、さらなる考察が必要であり、詳細な検討は稿を改めることとしたい。

4-2　音域

ウィーン原版とイギリス原版との音のさまざまな相違のひとつに、音域の問題が挙げられる。これは明らかに、当時主にウィーンなどドイツ語圏で使われていたピアノとイギリスで使われていたピアノとで音域が異なっていたことに由来する。すなわちウィーンの楽器は F1-f^4 の６オクターヴだったのに対し、ロンドンの楽器は C1-c^4 の６オクターヴであった。よく知られているように、Op. 106 はもともとはウィーンのシュトライヒャー製のピアノを使って作曲されていたが、途中でロンドンのブロードウッド製のピアノがイギリスの５人の音楽家から誕生日プレゼントとして贈られ、ベートーヴェンは音域の異なる２台のそれぞれで最高音・最低音まで使って作曲したため、当時のピアノでは１台で通して弾けない曲になった。

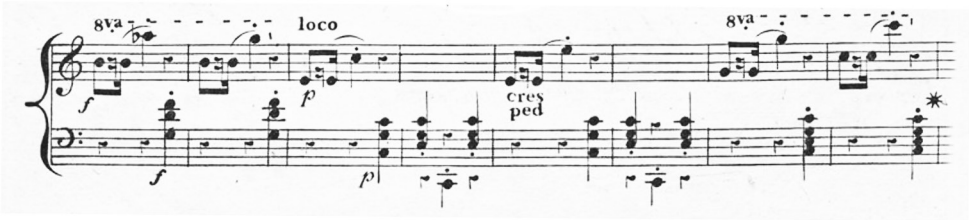
イギリス原版では、譜例５に示すように、c^4 より上の音域の音が用いられる場合、その音はオッシアとして楽譜の上に小さく記され、メインの楽譜は c^4 の音域内で弾けるように改変したパッセージが書き込まれている。こうしたオッシアの音を誰が考えたのかは定かではないが、ベートーヴェン自身でないことは確実で、イギリスでの出版を一任されていたリースである可能性が高い。

【譜例 5　ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ》Op. 106 第 1 楽章　（イギリス原版）】



こうした音域の改変は、その例こそ多くはないが、たとえば《7 つのバガテル》Op. 33-2 にも見られる。ここでは逆に、ベートーヴェンが 1802 年に作曲したときに使っていた 5 オクターヴの楽器の音域を越え、オクターヴ記号を使ってイギリスのピアノの最高音を使うように手を加えている（さらに、ベートーヴェン自身は書いていないペダル記号もある）。

【譜例 6　ベートーヴェン《7 つのバガテル》Op. 33-2】



また、イギリスの他の出版社に目を転じても、たとえばクレメンティ社でも「追加鍵のための」ということをタイトルページに謳って、高音域まで使う楽譜を出版している。あまり例は多くないが、こうした事例からは、イギリスの出版社にとって同地で一般に広まっているピアノの音域に合わせて多少の改変を施すことは特別なことではなかったと考えられよう。

5　おわりに

Op. 106 のイギリス原版が「リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションから出版された」という事実から一歩踏み込んで、その状況を観察してみると、出版におけるリースの役割に新たな光が当たる。すなわち、リースがリージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションの一員であったからこそ、Op. 106 はスムーズに出版に至り、かつ出版を一任されたリースがかなりの裁量でテクストに改変を加えられた。

ベートーヴェンの Op. 106 のイギリス原版は、たしかに今日の楽譜校訂者の観点からするならば、ゲルチュが指摘するように、「不純な」資料でしかないだろう（Gertsch 2020）。しかし、当時の脈絡に置くならば、フィルハーモニー協会が設立され、アーガイル・ルームが建設される、という活気に満ちたロンドンの音楽文化から世に送り出された楽譜だということがわかる。そのような視点からも、Op. 106 のイギリス原版は再考に値すると言えるであろう。

注

i　Op. 106 のベートーヴェンの自筆譜は、彼の死後 1827 年 11 月に行われた遺産競売によって、ウィーンの出版社アルタリア社の手に渡った可能性が高い。しかしその後、かなり早い段階で所在が確認されなくなっていた（Dorfmüller, Gertsch, Ronge 2014, Bd. 1: 666）。

ii　ボンのベートーヴェン・ハウスが主導する『ベートーヴェン新全集』の Op. 106 を含むピアノ・ソナタ集第 3 巻は、2023 年 8 月現在、まだ出版されていない。出版の遅れは、テクスト批判の難しさも一因ではあっただろうが、そればかりでなく校訂の担当者間の問題でもあるらしい（Gertsch 2020）。いずれにせよ、新全集校訂のためにノーベルト・ゲルチュが詳細に調査した Op. 106 に関する資料状況は、2001 年の論文にまとめられている（Gertsch 2001）。

iii　本稿執筆のきっかけとなったのは、2023 年 3 月 25 日に弘前大学で行われた日本音楽学会東日本支部例会でのシンポジウム「ベートーヴェンの『ハンマークラヴィーア』ソナタとロンドン」である。このときの登壇者である沼口隆氏、加畑奈美氏、菅原修一氏からは多くの示唆をいただいた。ここに記して感謝したい。

iv　出版社の歴史については、主にレアン・ラングリーの研究に依拠している（Langley 2013）。この論文では、ジョン・ナッシュ、リージェント・ストリート、フィルハーモニー協会の密接で複雑な関係が、多くの一次資料をもとに詳細に論じられている。

v　イギリスでは書籍を出版するためには、「書籍出版業組合事務所 Stationers' Hall」に申請する必要があった。今回は、データベース「Literary Print Culture: The Stationers' Company Archiv, 1554-2007」のトライアル版を利用してその記録を調査した。https://www.literaryprintculture.amdigital.co.uk
最初の登録は次の部分に記載されている。Register of entries of copies, 1819-1820, 6 Feb 1819 - 15 Sep 1820, pp. 71-76. ここに記された 21 点は、プレート番号の 1〜21 番ではないため、必ずしもプレート番号順に登録されたわけではないようである。

vi　Register of entries of copies, 1819-1820, 6 Feb 1819 - 15 Sep 1820, p. 254, 320-321.

vii　楽譜のタイトルページには「Lower Saloon. Argyll Rooms」と記されている。

viii　リージェンツ・ハーモニック・インスティトゥーションのものは大英図書館（GB-Lbl）、ロイヤル・ハーモニック・インスティトゥーションのものはロイヤル・アカデミー（GB-Lrm）所蔵のものを確認した。後者については IMSLP で閲覧可能（2023 年 8 月 22 日閲覧）。

ix　例外的に、ハウズの出版カタログ（A Catalogue of Music composed by W. Hawes and which may be had at the Royal Harmonic Institution, Argyll Rooms, Regent Street）は彼の楽譜に付けられていることが多い。

x　主にベートーヴェンの新カタログと、同社の出版物を多く所蔵する大英図書館の OPAC に基づいてまとめた。その他、主要な図書館の OPAC も参照したが、他にもある可能性は排除できない。

xi　ベートーヴェンは 1815 年 3 月 16 日、スマートに宛てて複数の作品（Opp. 91〜93、95〜97、113、115、117）を出版するイギリスの出版社を探すよう、価格表付きで依頼した（BGA790）。ただし、スマートは出版を請け負う会社を探さなかったか、奏功しなかったか、ともあれベートーヴェンは 6 月 1 日に今度はペーター・ザロモンに同様の内容を伝え、Opp. 91、92、96、97 がバーチャル社から出版の運びとなった。

xii　リースについては、ドナルド・W・マッカードル（McAdle1965）、かげはら史帆（かげはら 2020）の著作に

詳しい。

xiii「4月」と手紙には書かれているが、1819年5月25日の手紙で、次の郵便配収日にメトロノーム記号を送ると伝えており、またこの手紙が1819年7月13日にロンドンに届いていることから、「6月」の間違いではないかと推測されている。

xiv *Introduzione, Largo and Fuga from the Works of Jno Sebn Bach. Adapted expressly for Two Violins, Viola, Violoncello & Contra Basso. by J.B. Cramer.*
Organ Voluntaries. Consisting of Preludes & Fugues, Selected from the Works of John Sebastian Bach.（*with such alterations additions and accommodations, as have been deemed necessary for their general use in Churches*）. *by George Drummond.*

主要参考文献

Beghin, Tom. "Beethoven's *Hammerklavier* Sonata, Opus 106: Legend, Difficulty, and the Gift of a Broadwood Piano". In *Keyboard Perspectives*, vol. VII, 2014, pp. 81-121.

BGA = Brandenburg, Sieghard（ed.）. *Ludwig van Beethoven Breifwechsel Gesamtausgabe*. Munich: Henle, 1996-1998.

Carnelley, John. *George Smart and Nineteenth-Century London Concert Life*. Woodbridge, Suffolk, UK: The Boydell Press, 2015.

Dorfmüller, Kurt, Norbert Gertsch and Julia Ronge. *Ludwig van Beethoven: Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis. Revidierte und wesentlich erweiterte Neuausgabe des Verzeichnisses von Georg Kinsky und Hans Halm*. Munich: Henle, 2014.

English Musical Gazette, i（Mar. 1819）, p. 56.

Gertsch, Nobert. "Ludwig van Beethovens 'Hammerklavier'-Sonate Op. 106: Bemerkungen zur Datierung und Bewertung der Quellen". In *Bonner Beethoven-Studien*, vol. 2, Bonn: Beethoven-Haus, 2001, pp. 63-93.

Gertsch, Nobert. Beethoven's "Hammerklavier" sonata – The stony path to a reliable music text https://www.henle.de/blog/en/2020/06/01/beethovens-hammerklavier-sonata-the-stony-path-to-a-reliable-music-text/（2023年8月24日閲覧）

Hill, Cecil（ed.）. *Ferdinand Ries: A Thematic Catalogue*. New England: University of New England, 1977.

Irving, Howard. *Ancient and Modern: William Crotsch and the Development of Classical Music*. London: Routledge, 2018.

Kassler, Michael（ed.）. *The English Bach Awakening: Knowledge of J. S. Bach and his Music in England 1750-1830*. Aldershot: Ashgate, 2004.

Langley, Leanne. "A Place for Music: John Nash, Regent Street and the Philharmonic Society of London". In *eBLJ* 2013, Article 12.

MacArdle, Donald W. "Beethoven and Ferdinand Ries". In *Music & Letters*, Jan., 1965, vol. 46. no. 1, pp. 23-34.

Milligan, Thomas B. *Johann Baptist Cramer（1771-1858）: A Thematic Catalogue of his Works. Based on the foundation laid by Jerald C. Graue*. Stuyvesant, NY: Pendragon Press, 1994.

Ries, Ferdinand, Franz Gerhard Wegeler. *Biographische Notizen über Ludwig van Beethoven*. Coblenz: Bädeker, 1838.

Tomita, Yo. "'Most Ingenious, most Learned, and yet Practicable Work' The English Reception of Bach's The *Well-Tempered Clavier* in the First Half of the Nineteenth Century as seen through the Editions Published in London". In *Bach Notes*, no. 7, pp. 1-12.

Tyson, Alan. "The Hammerklavier Sonata and its English Editions". In *The Musical Times*, Apr., 1962, vol. 103, no. 1430, pp. 235-237.

Tyson, Alan. *The Authentic English Editions of Beethoven*. London: Faber, 1963.
大崎滋生『ベートーヴェン像再構築』東京：春秋社、2018 年。
かげはら史帆『ベートーヴェンの愛弟子：フェルディナント・リースの数奇なる運命』東京：春秋社、2020 年。
加畑奈美「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 のイギリス原版とその重要性について：そのリスト版、ビュロー版への影響の検討を通して」国立音楽大学大学院編『音楽研究：大学院研究年報』第 32 巻、209～224 頁、2020 年。
加畑奈美「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 の伝承・受容におけるロンドン原版の意義：演奏史とエディション比較を踏まえた考察をもとに」国立音楽大学大学院博士論文、2020 年。（＝加畑 2021a）
加畑奈美「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 とハンス・フォン・ビューロー」国立音楽大学大学院編『音楽研究：大学院研究年報』第 33 巻、55～70 頁、2021 年。（＝加畑 2021b）
沼口隆「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106『ハンマークラヴィーア』の 2 つの初版とイギリス初版の意義」国立音楽大学紀要編集委員会編『研究紀要』第 48 巻、25～33 頁、2014 年。